

三原市久井歴史民俗資料館

vol.4

モーマー通信



モーマー館長

なつ

懐かしモ～！昔のあかり

秋の夜長に…あかりは欠かせませんね。資料館に展示している、ちょっと昔の照明器具をご紹介します。



火を使うことが文明の第一歩でした。縄文・弥生時代の竪穴式住居の中央には、「炉」が作られており、食べ物の煮炊きだけではなく、あかりの役割もありました。それから電気が使われるようになるまで、昔の人はあかりに工夫をこらしていました。

久井地域に電気がついたのは大正7（1918）年で、市街地のみでした。久井全域に電気がついたのは、昭和10（1935）年です。

【行灯】

ろうそくや油脂が光のもとになっている灯火具です。使われ始めたのは、室町時代で、かつてはもち運び用でしたが、江戸時代に置いて使われるようになりました。日本家屋はすきまが多いので、消えやすく不便なため、灯台に紙の覆いをつけたものが使われ、形も角形と丸形に分けられます。



【がんどう】

現在の懐中電灯のようなもので、桶型の底に持ち手をつけ内側にろうそくを立てて照らしました。どこに向けても、常にろうそくは上に向き、伏せて置いても空気穴があるため、ろうそくの火は消えません。持ち主を照らさないで、強盗や強盗探しにも使用され、「強盗」の字が当てられることもありました。



【ちょう ちん 提 灯】



時代劇で
みたかぞ

古くは「挑^{ちようちん}灯」と書き、竹製の籠^{かご}に紙を貼っていましたが、その後竹ひごをらせん状に巻いて骨とし、紙や絹^{きぬ}を貼って口輪^{くちわ}と底輪^{そこわ}をつけた伸縮自在^{しんしゆじざい}の折りたたみ式になりました。

【カンテラ】

江戸時代末期から使用された、鉄や真鍮^{しんちゆう}の注ぎ口をもつ、ランプ以前の油用灯火具です。菜種油^{なたねあぶら}などの植物性油を入れて口から綿をだし、灯^ひを灯^{とも}しました。

明治時代になって石油用が普及しました。

【せきゆ 石油ランプ】

石油を金属製、またはガラスの油つぼに入れて使用する灯火具です。油を吸った芯^{しん}に火をつけ、ガラス製のほやで火が消えないように風から守ります。

明治初期は高価^{こうか}でしたが、ろうそくより石油の方が安く、菜種油やろうそくを使ったあかりよりも明るいため、明治中期には普及し、生活に変化をもたらしました。



★モーモーマンガ★ 「しりとり」



解説シートNo.1「久井地域歴史年表」を発行しました。歴史について、モ〜っと学んでみませんか♪

つづきは資料館で...

〒722-1303

三原市久井町下津 1397

三原市久井歴史民俗資料館

TEL・FAX 0847-32-7139

休館日 月曜日(月曜日が祝日の場合、翌日休館)、年末年始

アクセス 中国バス久井中停留所下車

いあんない図

